ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

⑫⑤ 金ピカ先生 佐藤忠志

「男の孤独死」が悲しいとは限らない

「変わり果てた姿」という言葉が、日本人は好きなようです。自分よりも成功した人間や美しかった人が堕ちたり老いていく姿に、さもしくも人間は、ほんの少しの快楽を覚えてしまう生物です。

この人の訃報が流れた夜、年若い友人たちと夜中まで飲んでいました。見てください、こんなに変わり果てちゃって…とスマホで最近の写真を見せられました。

「驚くほどの写真か？　みんな老いて死ぬときはこんなもんやろ」

という私の言葉に、彼らはぽかんとしていました。まだ40代で健康な彼らには想像がつかないのかもしれません。しかし、人生において免れることのできない4つの苦悩、「生老病死」とはすなわち、肉体が枯れゆく旅。足し算だった人生が、年齢とともに引き算の人生に変わっていく。元気溌剌でピチピチのまま死んだ人がいたら、お目にかかりたいものです。

元祖カリスマ予備校講師、金ピカ先生こと佐藤忠志さんが、9月24日の朝、都内の自宅で冷たくなっているのを地域包括支援センターのスタッフと警察が発見。68歳でした。死因不明のため、司法解剖が行われるとの報道です。

2年半前に夫婦げんかをして妻が出て行ってからは一人暮らしでした。しかし、「妻は私が暴力を振るうと嘘をついたり、勝手に愛車を解約したので未練はない」とも話していたようです。

在宅医の立場から私は、『男の孤独死』という本を一昨年出版しました。孤独死の7割は男性です。しかも60代でアルコールが好きな男は、要注意。私自身もバッチリ当てはまります。

だけど、孤独死自体が悲しいものであるとは書いていません。人間、誰しも死ぬときはひとり。ある意味ピンピンコロリということです。ただ、できれば早めに見つけてもらいたい。佐藤さんは、デイサービスを受けていたので、比較的早い発見だったはず。

死の1カ月前に受けた、週刊現代のインタビューで佐藤さんは、こんなふうに話しています。

「今、口にするのは、焼酎とタバコくらい。食事はほとんど食べない。（自分は）生きる屍（しかばね）。やりたいこともなければ、何もしたくないんだ。とにかくもう、世の中への関心がない」

もしも佐藤さんがこの時期、積極的に医療に関わっていたならば、鬱病やアルコール依存症と診断されて、今頃は強制入院の日々だったと想像します。でも私が彼の在宅医だったら、「面白い人生だったんやろうなあ。話を聞かせて」とスナックに誘い、一緒にカラオケをしていたかも。

入院させられずに趣味の日本刀と酒の傍で、自宅で旅立った佐藤さん。これも一つの尊厳死の形ではないでしょうか。